

文末における現代日本語動詞のアスペクトについて

張 平*

キーワード: アスペクト, 二つの時間, 文の持続, 形式と意味, 存在

要 旨

スル / シテイルの対立が実際の言語行為において、どちらを選ぶかという選択から発見されたように、動詞+テイルの意味は発話の段階(センテンスのレベル)で捉えるべきと考える。そして、形式と意味との関係から、スル / シテイルの対立を統一的に捉えるために、スル / シテイルを動詞というカテゴリー全体と関わり、それに支えられるものとして捉え、解釈を試みた。

文の構造から、シテイル形式を、事柄の作用の持続を表わす文の持続と、動作、変化などの主体が持続の状態にあることを表わす主語の持続とに分ける。

時間を、人間が任意的に決めるある時点を中心とする「前—○—後」という構造を持つ人為的な時間と、一個の客体として、人間を含む物事を順序づける、年月日や時計の刻む時刻という二つの時間に分け、そして、「前—○—後」という構造を持つ時間に基づく文の場合のみ、アスペクトが成立すると見る。

はじめに

われわれ日本語学習者は、日本語を使う時、常に悩むことの一つに文末述語の動詞をスルで終わらせるべきか、それともシテイルのほうがよいかの選択を挙げることが出来る。日本語学習者のように悩んでしまうことはないと思うが、日本人でもその言語行為においては、スルかシテイルかの選択を行うらしい。奥田靖雄(1978)の理論は、このどちらを選ぶべきかを原点に出発している。スルとシテイルの対立を現代日本語動詞のアスペクト論の原点に据えた奥田の功績は大きい。しかし、スルとシテイルの対立を個々の動詞に限定して捉え、スル / シテイルの対立を持つ動詞をアスペクト動詞とし、スル / シテイルの対立を持たず、そのどちらか一方を取る動詞、あるいはどちらを取っても表わす内容が一見そう変わらない動詞をアスペクトの範疇から除外する奥田には賛同しかねる。筆者はスル / シテイルの対立を現代日本語動詞というカテゴリー全体に関わり、支えられるものとして捉えられるべきだと考える。

奥田において、動詞がシテイルの形で表わす actual な意味によって動詞の分類が行われているが、筆者は動詞がシテイルの形で表わす意味の傾向性は認めるが、そのような分類の方法論的

* ZHANG Ping: 鳴門教育大学大学院修士課程在籍。

な妥当性を疑う。スルかシテイルかの選択は実際の言語行為において始めて生じる問題だから、論理的にも動詞+テイルの意味は発話の段階(センテンスのレベル)で決定されるものとして捉えるべきだろう。

文末におけるシテイルは、(1) 動的持続、(2) 静的持続、(3) 作用の持続と三つに分けることが出来るが、(1),(2) は主語(の表す動作や状態の主体)が持続の状態にあることを表わし、(3) は文(の表わす事柄の作用)が持続状態にあることを表わすので、文の構造から見て、(1),(2) を主語の持続とし、(3) を文の持続として、上位分類を設け、主語の持続の下位分類として、(1) 動的持続と(2) 静的持続との対立を認める。文の持続は述語動詞が動的であろうと静的であろうと、事柄の作用の持続という点では共に静的である。

1. シテイル=持続

簡単に言えば、シテイルの表わすアスペクト的な意味は持続である。言い方はいろいろあるが、意味は結局のところ、一つである。逆に言えば、持続を表わす文末動詞のシテイル形式は、まづアスペクトの範疇内と考えてよいだろう。

このことに関しては、例文1, 2, 3のようないわゆる持続動詞や結果動詞の場合は問題がないが、例文4, 5, 6, 7のような動詞のシテイル形式は持続を表わすと認めても、スルの形で文末述語になることが普通はないから、非アスペクト動詞とされる。しかし、考えてみれば、それらの動詞が文末においてスルの形を取らないのは動詞自身に何かの制限があるためではなく、山や才能などが一旦ある状態が形成されると、永久的な状態を保つからである。言い換えれば、事柄自体に、スルとシテイルの間を行き来する要求がないからである。

スルとシテイルの間を行き来することを要求しない永久的な持続的状态を表わす場合、シテイルを使うのは、例文4, 5, 6, 7のような動詞に限ったことではなく、例文8, 9, 10のようないわゆる持続動詞や結果動詞も同じである。違うのはただ、動詞の意味的性格による主格に立つ物事の内容的幅の広狭である。

しかし、もし、聳える、勝れる、富む、似るといった類の動詞が、どうせスルとシテイルの間を行き来する必要のない永久的な状態しか表わさないから、シテイルを止めて、動詞の原形—スルの形で状態の持続を表わそうというならば、アスペクトの範疇から離脱した、いわゆる脱アスペクトと考えてよいと思うが、そうではなく、持続を表わすシテイル形式を一徹に固持しているのだから、むしろ積極的なアスペクト形式と認めるべきではないか。

1. 独楽が回っている。
2. ネクタイが曲がっている。
3. 川が静かに流れている。

4. 山が聳えている。
5. 才能が勝れている。
6. 経験に富んでいる。
7. 顔は母に似ている。
8. この招き猫は右手を挙げている。
9. この町に二本の川が流れている。
10. 道が曲がっている。

2. スル＝非持続

シテイルの表わすアスペクト的な意味を持続とすれば、スルの表わすアスペクト的な意味を非持続としてよからう。分析的に言えば、シテイルは分割可能で、スルは分割不可能、ということになる。

スルの表わすアスペクト的な意味が非持続とするならば、文末動詞がスルの形で持続を表す文があれば、その場合のスル形式は、スルとシテイルが対立しつつ、互いに依存する関係にあるという法則を突き破って、アスペクトの範疇から遊離したものと考えてよからう。例えば、例文11のような場合がその一つである。例文11は、スルの形で「この花」の性質—永久的な持続的存在を表わしている。

例文12は、シテイル形式で actual な現在の持続を表わしているもので、例文12のシテイルをアスペクト範疇内のものと考えてよい。匂う、存在する、遊ぶ、あたるなどの動詞は文末において一見スル / シテイルのどちらを使っても表わす内容がそう違わないように見えるかも知れないが、実は質的に違うのである。

文末においてスルの形で物事の性質を表わす現象は、他の動詞にも見える。沸騰する、読む、話す、喋る、担ぐ、言うの何れも動作性の強い動詞だが、例文13～18のような文においては、その動作性を放棄し、アスペクトとは無関係に、持続的な存在としての物事の性質を表わしている。

言い換えれば、動詞はもともと必要に応じては動詞を止めて、形容詞的な役割を担う本領を持っている。

これまで述べてきたように、スル / シテイルの対立を動詞というカテゴリー全体に関わるものとして捉えないと、現代日本語動詞の完成された組織的な体系としての全体像も見えてこないし、アスペクトという概念における意味と形式との統一的な解釈もできない。文末動詞のスル・シテイルがアスペクト範疇内か外かは、意味と形式が一致しているか否かも重要な鍵である。

11. この花は匂いますね。
12. 梅の花が匂っていますね。

13. 水は100度で沸騰する。
14. この子は漫画ばかり読む。
15. 彼女は上手に英語を話します。
16. あの人はよく喋りますね。
17. 若い頃は、米だわらを2俵担いだ。
18. 秀吉は幼名を日吉丸といった。

3. 存在と存在形式

スル / シテイルの対立を持たないとされる動詞に、ある、いるがある。確かに方言の場合を除けば、あるといふは常にスル形式を取り、スルかシテイルかの選択には無縁であるが、スル / シテイルの対立を動詞全体から捉えてみる時、あるといふのアスペクト体系における位置づけを見る必要があると思う。

あるといふはスル形式で分割可能な意味を表わす。このことは一見、シテイルは分割可能、スルは分割不可能というアスペクトの形式と意味との対応関係を破っているように見えるが、このことは、あるはシテアルのアルの本動詞で、いるはシテイルのイルの本動詞であることから解釈されるように、あるといふは存在を表わし、シテアル、シテイルは存在の形式を表わしている。したがって、あるといふがスル(○+アル、○+イル)の形で分割可能な意味—存在を表わすのは現代日本語動詞のアスペクト体系に適ったことである上、アスペクトの形式を造り上げる土台であることを確認しておきたい。

関西の言葉では「いている」という言い方をするが、それは、いるがシテイルを造り上げる元であることを忘れ、単純な類推から起こった現象と考えられよう。

もっとも、スル / シテイルの対立関係から見れば、スルは存在形式、シテイルは存在形式の持続、ある、いるは単なる存在を表わすということになる。

4. 動詞の語意的な意味とアスペクト

流れる、上げる、曲がる、落ちるなどの動詞がシテイル形式を取った時、実際の言語行為と切り放して、流れている、上げている、曲がっている、落ちているを単なる形式として見ると、確かに、流れている、上げているは動作の持続、曲がっている、落ちているは変化の結果という印象を受ける。それは言語行為における使用頻度と、主格+動詞述語のようなもっとも簡素なセンテンスの場合に「動詞+テイル」の表わす意味より抱かされる印象であろう。動詞および動詞+テイルの表わす意味に認められる傾向性は、初級段階における日本語学習と教育に大きな便宜を

提供していることもここに加筆しておきたい。

しかし、実際の言語行為においてスルかシテイルかの選択が行われるという事実からスルと、シテイルの対立が発見されたように、アスペクトという概念は実際の言語行為、つまり、動詞がセンテンスに使われた時に成立するものである。例文 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26 で分かるように、動詞+テイルが動作の持続と変化結果の持続とどちらを実現するかは、センテンスのレベルではじめて決まるものである。もっとも、主格に立つ物事の内容的幅の狭い動詞(坐える, 富む, 似る, 勝れるなど)は自ずとアスペクト的な意味にも傾向性的な制限が加わる。

19. 川が静かに流れている。
20. 血が椅子の下にまで流れている。
21. 床に一万円が落ちている。
22. 涙が膝の上にぽたぽた落ちている。
23. 父は棚に荷物を上げている。
24. 花子は手を上げている。
25. 道が曲がっている。
26. 鉄棒が氣功の神秘的な力によって徐々に曲がっている。

6. 二つの時間とアスペクト

物事がある状態を一定の時間保つことを持続と言つてよいと思うが、アスペクトの概念において、問題となるのは時間の長さではなく、文の捉える物事の持続状態がある時点をカバーしているか否かである。言語行為においても、ある時点が物事の示す状態の経過時間に割り込んでいる場合にシテイル、ある時点前か後にその状態が発生する場合にはスルを選ぶ。(但し、その状態が次節で述べるように、主語となる主体の示すものではなく、文の表わす事柄の持続である場合は、ある時点前に発生した事柄でも、その事柄の効力の持続がその時点をカバーするので、シテイルが選ばれる。) こういう選択の基準とされる時点は人間が任意的に設定するものである。この時点を中心に「前—○—後」という構造を持つ時間は、人為的な時間と言ふことができる。その典型的なものは人間の存在を基点とする過去・現在・未来という時間である。人為的な時間とは逆に、年月日や時計の刻む時刻は一個の客体として、人間を含む物事を順序づける時間である。したがって、この時間に依つて物事を捉えようとする時、文はアスペクトから遊離する。例えば、年譜や記録などはそういう現象の典型的な例と言えよう。

7. 主体の持続と事柄の持続

文末動詞のシテイル形式の表わす持続は大きく分けると、次の三つが考えられよう。

(1) 動的持続

27. 太郎は今本を読んでいる。
28. 本当に死んでしまうまでには実は気がつかずに少しずつ死んでいるわけなんだね。

(2) 静的持続

29. 庭には大きな木が倒れている。
30. 太陽は地球から遠く離れている。
31. 坊やの顔は母親に似ている。

(3) 作用の持続

32. 彼女は前に1度結婚している。
33. 彼は去年の3月に彼女と結婚している。
34. 彼は20年代に画期的な論文を書いている。

上述の三つの持続の中で、(1) (2) は同レベルにおける二つの対立する側面だが、(3) は文の構造から見て、(1) (2) とは違うレベルのものである。(1) (2) の場合は主語(動作、結果、状態などの主体)が文末述語のシテイルと関わり、それが持続の状態にあることを表わす。それに対して、(3) の場合は文末述語のシテイルと関わるのは主語ではなく、テイルに受け止められ、テによって完結される文である。図で示すと次のようになる。

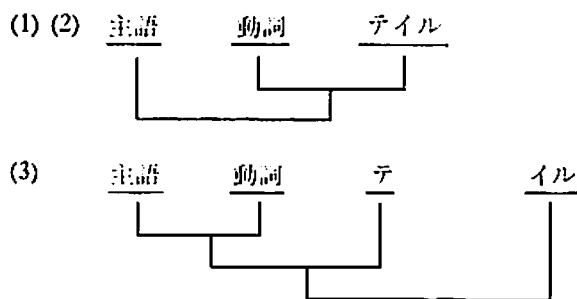


図 1

したがって、(1) (2) を主語の持続、または主体の持続、(3) を文の持続、または事柄の持続と呼ぶことができる。

主語の持続の場合は動的持続と静的持続との二つの対立する側面が認められるが、文の持続は事柄の作用の持続なので、そのような側面は認められない。

8. 思う、分かるについて

特殊な性格を持つ動詞について、ここでは、思うと分かるを取り上げて考えてみたいと思う。「(私は)・・・と思う」は非常によく使われるパターンの一つで、分かるも使用頻度の高い動詞である。そして、実際は、「思っている」「分かっている」のに、例文 35, 38 のように文末でスル形式を取ることがある。思うと分かるは本人がなんらかの形で表出しないう限り他人には分からない心理状態を表わす言葉だから、自分の心理状態を他人に話す時、相手にとってまず問題になるのは、発話時点において話者がある心理状態の持続中にあるか否かではなく、「ある心理状態」であるかどうか、あるいはどういう心理状態かの表明である。このことは、例文 36, 40 のように、他人の心理状態を表現する時は、シテイル形式を取ると表裏をなしている。つまり、他人の心理状態に言及する時、話者がそれを知っているという前提の上に立っているというわけである。(仮にその発言が嘘であっても、論理的には「知っている」の前提が必要である。)

というわけで、思う、分かるは特殊な性格が前面に出るような場合を除くと、動詞の本領を発揮し、過去・現在・未来という、人間の現存を基点とし、人間の意識に依存する時間軸に乗せられた発話の場合なら、例文 37, 39 のように、シテイル形式で持続を表わす。

が、思う、分かるは、聳えるや勝れる、富む、似ると同じようにあまりにも動作性が乏しいので、動作、変化を表わす「(これから)・・・スル」という表現は持たない。しかし、聳えるなどの場合は、それらの動詞の表わす状態が出来上がる瞬間を捉えることはなかなかできないので、シタの形を取ることなく、いつもシテイルの形で文末に現われる。分かるの場合は、それとは対照的で、「分からない」から「分かる」への変化は顕著なので、シタの形は、むしろ専らその変化を表わす専用の形となっている。この点に関しては、思うのほうはそれほど個性的ではない。

35. 私はアメリカへ行ってみたいと思います。
36. 彼もアメリカへ行ってみたいと思っています。
37. 私はアメリカへ行こうと思っています。
38. これは分かるが、これはよく分からない。
39. それはよく分かっています。
40. そのことなら、皆さんは分かっています。

おわりに

本論は、現代日本語動詞のアスペクトは、実際の言語行為においてはじめて直面する問題であり、テンスやアスペクトは、人間の意識に依存する概念である、そして、形式と意味との一致という三つの観点から、文末動詞のアスペクトを統一的に捉えようと試みた。なお、浅見について

先学，同仁の皆様から忌憚のない御叱正を戴きたい。

参 考 文 献

- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって」, 『教育国語』, 53-54.
—— (1978) 「アスペクトの研究をめぐって——金田一的段階」, 松本泰丈編 『日本語研究の方法』, むぎ書房.
高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』, 国立国語研究所報告 82, 秀英出版.
張 平 (1987) 「文末述語における現代日本語動詞のテンスとアスペクト」, 『日語学習』 27, 商務印書館.
張 平 (1988) 「現代日本語動詞のアスペクト研究について」, 『外国語』 57, 上海外国語学院.